

So sánh thủ pháp nghe của sinh viên Việt Nam chuyên ngành tiếng Nhật bằng phương pháp phân tích nhân tố

ĐỖ HOÀNG NGÂN, FUKAMI KANETAKA *

Mục đích của bài báo này là tìm hiểu thủ pháp nghe của sinh viên đại học chuyên ngành tiếng Nhật và sinh viên đã tốt nghiệp, phân tích sự khác nhau giữa 2 nhóm đối tượng nhằm hỗ trợ cho việc nâng cao hiệu quả phương pháp giảng dạy kỹ năng nghe hiểu tiếng Nhật ở trường đại học của Việt Nam. Nghiên cứu dựa trên kết quả điều tra về 32 thủ pháp nghe được sinh viên năm thứ 4 chuyên tiếng Nhật và sinh viên đã tốt nghiệp đánh giá về mức độ sử dụng theo 5 cấp độ từ 1 (hoàn toàn không dùng) đến 5 (rất hay dùng). Số liệu được xử lý phân tích và kiểm chứng độ tin cậy bằng phương pháp thống kê phân tích nhân tố, phép kiểm định T (T-test), và phép phân tích phương sai. Kết quả cho thấy có sự khác biệt đáng kể về tần số sử dụng các thủ pháp nghe “Hỗ trợ”, “Văn hóa”, “Suy luận”, “Bổ sung thông tin”, “Ngữ âm và từ” giữa hai nhóm đối tượng. Đồng thời, tương quan giữa các thủ pháp nghe cũng khác nhau ở hai nhóm. Ngoài ra, kết quả phân tích cho thấy cả hai nhóm đều có xu hướng sử dụng nhiều các thủ pháp nắm nội dung hơn là các thủ pháp chú ý tới ngữ âm và từ. Trong khi sinh viên dùng nhiều thủ pháp “Văn hóa” thì sinh viên đã tốt nghiệp dùng nhiều thủ pháp “Suy luận” và thủ pháp ứng đối khi không hiểu.

ベトナム人の大学生と卒業生が使用する聴解ストラテジーの比較 —因子分析を用いて—

1. はじめに

聴解はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たし、聞き取れないとコミュニケーションが成立しないと言えよう。しかし、国際交流基金の2007年度日本語能力試験の結果概要によると、「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の3類別の中で、どのレベルの学習者においても、海外に在住している受験者の聴解の平均点が最も低いことが明らかになっている。

* Khoa Sau đại học, Đại học Hiroshima

近年、ベトナムでは日本語教育が盛んになり、日本語学習者数が急速に増加している。国際交流基金の 2006 年海外日本語教育機関調査結果によると、ベトナムには日本語学習者数が約 3 万名存在し、学習者数の上で世界の上位国に入っている。また高等教育機関における日本語教育も盛んである。しかしながら、ベトナム人の大学生が卒業してから、実際に日本語を使う際、どのような困難に直面しているか、聞く際、どのようなストラテジーを使用するかなどについての研究はまだされていない。大学における日本語教育の効果を向上させるためには、現役大学生だけではなく、実際に仕事の上で日本語を使用している卒業生のストラテジーの使用についても検討する必要と思われる。

2. 先行研究

学習ストラテジーはオックスフォードの定義によると学習をよりやすく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的に、そして新しい状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動である (Oxford, 1990)。

第二言語の聴解教育に関する先行研究には、聴解の過程、聴解に影響を与える要因、聴解ストラテジーなどを検討した研究が多く見られる。河内山 (1999) は、聴解ストラテジーの意識的使用による効果を検討した結果、「聴き手が聴解ストラテジーを意識的に使いながら聴くほうが、そうでない場合よりも高い聴解効果を上げ、学力の高い学習者ほどその傾向が強い」と指摘している。

日本語を主専攻とする大学生の学習者を対象とした日本語聴解に関する研究としては尹松 (2000)、尹松 (2001) があげられる。尹松 (2000) は大学生 2 年生 90 名を対象とした実験で、語彙リスト、及び写真、地図を与えたほうが、何も与えないより、テキスト理解を促進する効果があることを明らかにした。また、語彙提示は、写真・地図提示より、テキスト全体の理解の促進に効果があったことと、写真・地図提示はテキスト全体の理解においての効果は見られなかったが、重要な内容を把握するためには有効であったことの 2 点を報告している。尹松 (2001) は日本語を主専攻とする中国人の大学生を対象に教室内と教室外での聴解ストラテジー使用の意識、及び聴解ストラテジーの使用と聴解力との関係について調査した。その結果、よく使われているストラテジーの中で、聴解授業では、補償ストラテジーの「視覚的情報を見ながら聞く」、メタ認知ストラテジーの「興味があるところは熱心に聴く」、認知ストラテジーの「メモを取る」、と教室外では、メタ認知ストラテジーの「目標を立てる」、認知スト

ラテジーの「テープを繰り返して聴く」であった。認知ストラテジーの「全体の意味や流れを注意して聴く」、補償ストラテジーの「前後のつながりから推測する」の使用と聴解力との関わりが確認された。

では、ベトナム人学習者の聴解ストラテジーと聴解力の関わりはどうなっているのだろうか。それは、現役大学生と卒業生で違いがあるのだろうか。本研究は、これを明らかにするための予備段階として、ベトナム人学習者（現役大学生と卒業生）の聴解ストラテジーの構成に関し、考察しようとするものである。

3. 研究の概要

本研究はベトナムの大学の日本語学習者を対象とし、主に次のような点を検討することを目的とする。

- ① 現役大学生が日本語を聞く際、どのようなストラテジーをよく使用しているか。
- ② 卒業生が日本語を聞く際、どのようなストラテジーをよく使用しているか。
- ③ 卒業生のストラテジーの使用は現役大学生と比較するとどのような類似点と差異点があるか。

4. 調査

4.1 調査対象者

4.1.1 調査 1（現役大学生を対象とした調査）

調査対象者は、日本語を専門とするベトナムの 2 大学の 4 年生で、A 大学 41 名、B 大学 22 名の計 63 名であった。そのうち男性が 20 名、女性が 43 名であった。日本語学習歴については全員 3 年以上の日本語学習経験がある。

4.1.2 調査 2（卒業生を対象とした調査）

調査対象者はベトナムの大学の日本語科の卒業生 68 名であった。対象者の年齢は 25 歳以下 31 名、26-30 歳 24 名、31-35 歳 4 名、男性が 18 名と女性が 41 名であった。卒業生 68 名から回答が得られた。卒業してから 4 年以上経過している卒業生の場合を除外した結果、分析対象者は 59 名となった。

4.2 調査方法

調査は集団形式の質問紙を用いて行なった。質問紙の作成には Oxford (1990) の SILL (Strategy Inventory for Language Learning)

と尹（2001）の聴解のストラテジーを参考した。Oxford（1990）の SILL は学習ストラテジーを直接ストラテジーと間接ストラテジーの 2 のグループに大きく分けている。本研究では、尹（2001）の聴解のストラテジーを参考しながら、SILL の学習ストラテジーを聞く際のストラテジーと一般的なストラテジーの聴解ストラテジーに修正した 32 項目を使用した（質問項目は、資料を参照）。オリジナルの日本語で書かれた質問紙はベトナム語に翻訳し、バックトランスレーションを行い、翻訳の適確性を確かめた。それぞれの質問に対し、①非常によく使用する、②よく使用する、③ときどき使用する、④あまり使用しない、⑤全然使用しない の 5 段階で回答してもらった。

また、性別、母語、学年、日本語学習年数、渡日経験の有無と滞在期間を記入してもらった。データを、まず、Excel で処理し、探索的因子分析を行い、聴解ストラテジーの構成を検討し、相関分析を行った。現役大学生と卒業生のストラテジー使用の平均値の有意差を分散分析および t 検定によって検討した。

調査は 2007 年 2 月～3 月の間と 2007 年 8 月～9 月の間、ベトナムの大学で実施した。

4.3 調査結果

4.3.1 探索的因子分析

探索的因子分析は最尤法による因子抽出とプロマックス回転による因子軸回転を用いて、ステップワイズ変数減少法（Stepwise Variable Selection in Exploratory Factor Analysis）を採用した。大学生のストラテジー使用は、どの因子にも負荷量が.40 に満たない項目を省いて、19 項目により再度、主成分分解・バリマックス回転により因子分析した。その結果を表 1 に示す。

表 1 聴解ストラテジーの因子分析（主成分分解・バリマックス回転後）の負荷量（大学生）

項目の内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6
29 日本人がいるところに行って日本語を聴く機会を作る	.81	.06	.04	-.03	.04	-.00
28 日本人と話す機会を見つけるようとする	.73	.15	.07	.00	.29	.01
30 ラジオの日本語の放送を聴くようにうる	.56	.01	.01	.02	.11	.28
32 NHK の衛星放送を見るようにする	.49	.04	.16	.08	-.14	.04

7 得た情報を基にして話テーマについて推測する	-.07 .10	<u>.79</u> <u>.55</u>	.02 .11	.09 .04	.10 .20	-.06 .27
8 既に持っている知識と関連づけて聴く	-.01	<u>.54</u>	.14	.01	.10	.26
6 分からないところは前後のつながりから推測する	.17	<u>.48</u>	.05	.09	-.04	.07
9 キーワードなどを探す						
21 話し手のノンバーバル・ワードに基づいて意味を把握する	.07	.19	<u>.65</u>	.10	.06	.04
19 話し手のアクセントやイントネーションを基にして意味を把握	.18	.19	<u>.53</u>	.03	.01	.12
3 視覚的資料がある場合はそれを見ながら聴く	-.00	-.05	<u>.40</u>	.15	.26	-.09
17 人の話しが分からないとき、ゆっくり話してもらう	.07	.13	.07	<u>.86</u>	.05	.01
16 人の話しが分からないとき、リピートしてもらう	-.03	.09	.11	<u>.72</u>	.11	.05
18 一回聴いて、分からない場合は、話し手に聞く	.09	-.03	.19	<u>.50</u>	.07	-.02
27 日本文化や日本事情を積極的に学ぶ	-.01	.13	.05	.09	<u>.53</u>	.11
25 日本の歌を聴くようにする	.17	-.02	.16	.04	<u>.48</u>	.14
24 日本の映画やドラマのビデオや VCD を見るようにする	.31	.05	.38	.03	<u>.41</u>	-.00
11 単語の意味を母語に訳しながら聴く	.30	.20	.03	-.05	.00	<u>.54</u>
12 単語の文法・文型的な特徴に注意しながら聴く	.08 .18	.15 .20	.10 .19	.08 .08	.10 .06	<u>.51</u> <u>.42</u>
10 音声の特徴(高低・長短・アクセント・イントネーションなど)を注意しながら聴く						

第1因子は、「日本人がいるところに行って日本語を聴く機会を作る」、「日本人と話す機会を見つけるようとする」、「ラジオの日本語の放送を聴くようにする」と「NHKの衛星放送を見るようにする」に負荷量が高く、具体的な聞く方略ではなく、授業以外に聞く機会を増やすことに関するもので、「補助」と命名した。第2因子は、「得た情報を基にして話テーマについて推測する」、「既に持っている知識と関連づけて聴く」、「分からないところは前後のつながりから推測する」、「キーワードなどを探す」に負荷量

が高く、推測・知識の関連に関する方略から、「推論」と命名した。第 3 因子は、「話し手のノンバーバル・ワードに基づいて意味を把握する」、「話し手のアクセントやイントネーションを基にして意味を把握」、「視覚的資料がある場合はそれを見ながら聴く」に負荷量が高く、聞いた言葉の内容に言葉の意味以外から情報を追加するため「情報追加」と命名した。第 4 因子は、「人の話しが分からないとき、ゆっくり話してもらう」、「人の話しが分からないとき、リピートしてもらう」、「一回聴いて、分からない場合は、話し手に聞く」に負荷量が高く、聴く際、分からないとき使用される方略から「聞き取れない際の対応」と命名した。第 5 因子は、「日本文化や日本事情を積極的に学ぶ」、「日本の歌を聴くようにする」、「日本の映画やドラマのビデオや VCD を見るようにする」に負荷量が高く、聴解力を高めるためと日本の文化や日本事情を分かるようにする方略であるため「文化的」と命名した。第 6 因子は、「単語の文法・文型的な特徴に注意しながら聴く」、「音声の特徴(高低・長短・アクセント・イントネーションなど)を注意しながら聴く」に負荷量が高く、「音声・単語」と命名した。 α 係数は、「補助」が.84、「推論」が.72、「情報追加」が.81、「聞き取れない際のストラテジー」が.77、「文化的」が.74、「音声・単語」が.79であった。このように、因子構造の明確さと信頼性の高さは十分に確認されたとと言える。

卒業生のストラテジー使用も、どの因子にも負荷量が.40 に満たない項目を省いて、19 項目により再度、主成分分解・バリマックス回転により因子分析した。その結果を表 2 に示す。

表 2 聴解ストラテジーの因子分析（主成分分解・バリマックス回転後）の負荷量（卒業生）

項目	1	2	3	4	5	6
X30	<u>0.66</u>	-0.01	-0.03	-0.20	0.09	-0.02
X29	<u>0.60</u>	-0.04	0.05	0.12	0.08	0.19
X32	<u>0.59</u>	-0.04	0.04	0.05	0.22	0.01
X28	<u>0.44</u>	0.18	-0.34	-0.09	0.19	0.05
X6	0.00	<u>0.96</u>	-0.05	-0.08	0.10	0.26
X8	-0.08	<u>0.66</u>	0.26	-0.09	0.06	-0.04
X9	-0.24	<u>0.51</u>	0.14	0.01	0.10	0.26
X7	0.02	<u>0.49</u>	0.24	-0.10	0.07	-0.07

X19	-0.11	0.06	0.59	-0.12	-0.19	0.28
X21	-0.25	0.01	0.58	0.14	-0.14	0.28
X3	0.26	0.06	0.53	-0.15	0.10	0.06
X16	-0.08	0.06	-0.12	0.91	-0.16	-0.11
X18	-0.10	0.11	-0.12	0.64	0.05	-0.39
X17	0.11	-0.02	0.21	0.41	0.13	-0.06
X24	0.27	-0.05	0.11	0.00	0.96	-0.00
X25	0.09	0.05	0.20	-0.06	0.54	0.26
X27	0.19	0.18	0.30	-0.02	0.46	0.22
X11	0.08	-0.13	-0.19	-0.21	-0.11	0.67
X12	-0.02	0.06	-0.01	-0.22	0.06	0.56
X10	0.18	-0.00	0.31	0.10	0.22	0.48

X—は質問項目の番号を指す。

表 1 と表 2 を見ると、現役大学生と卒業生のストラテジー使用の構成は同じであるため、因子名も同様にした。また、 α 係数は、「補助」が.76、「推論」が.78、「情報追加」が.85、「聞き取れない際の対応」が.79、「文化的」が.72、「音声・単語」が.83 であった。このように、因子構造の明確さと信頼性の高さは十分に確認されたと言える。

4.3.2 現役大学生と卒業生のストラテジーの相関関係

まず、因子間の関係を検討するために、相関分析を行い、現役大学生の場合の結果を表 3 に示した。

表 3 因子間の相関係数（現役大学生）

因子の内容	1.	2.	3.	4.	5.
補助	—				
推論	-0.007	—			
情報追加	0.221**	0.426***	—		
聞き取れない際の対応	0.346**	0.014	0.312**	—	
文化的	0.686***	0.334**	-0.077	0.129	—
音声・単語	0.008	0.015	0.289**	-0.052	-0.017

*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

表 3 は現役大学生の相関分析の結果を示したものである。「補助」は「文化的」、「聞き取れない際の対応」及び「情報追加」と相関関係が見られた。

「推論」は「情報追加」および「文化的」と相関関係が見られた。また、「情報追加」は「聞き取れない際の対応」と「音声・単語」の間も相関関係が示された。他の因子間には有意な相関関係が見られなかった。

卒業生の場合の相関分析の結果を表 4 に示した。「文化的」と「補助」の相関係数は 0.63 であり、相関が見られた。つまり、「補助」の使用頻度が高いほど、「文化的」もよく用いることが示された。また、「補助」は「推論」ともやや相関関係が認められた。「情報追加」と「推論」の間にも相関関係が見られた。さらに、「音声・単語」と「推論」逆相関関係があり、「音声・単語」と「情報追加」の間に相関関係が見られた。

表 4 因子間の相関係数（卒業生）

因子の内容	1.	2.	3.	4.	5.
補助	—				
推論	0.318**	—			
情報追加	-0.175	0.353***	—		
聞き取れない際の対応	0.019	-0.001	0.170	—	
文化的	0.631***	0.032	-0.094	0.136	—
音声・単語	0.080	-0.315**	0.354***	-0.097	-0.02

*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

4.3.3 現役大学生と卒業生のストラテジー使用の平均値と標準偏差とその比較

現役大学生と卒業生の因子別の平均値と標準偏差を表 5 に示した。

表 5 現役大学生と卒業生の比較

	現役大学生 (n=63)		卒業生 (n=59)		F 値	比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
補助	2.87	0.60	3.12	0.78	4.52 *	G1<G2
推論	3.66	0.41	3.95	0.78	9.44 **	G1<G2
情報追加	3.31	0.42	3.43	0.45	1.62	
聞き取れない際の対応	3.75	0.53	3.95	0.49	5.11*	G1<G2
文化的	3.96	0.32	3.61	0.52	16.12***	G1>G2
音声・単語	2.85	0.52	2.95	0.41	0.88	

*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

表 5 で、G1 は現役大学生、G2 は卒業生を指す。

現役大学生の場合、「文化的」の平均値が最も高かったが、卒業生の場合、「聞き取れない際の対応」と「推論」の平均値がほぼ同じで、他の因子より高かった。このことは、現役大学生が「文化的」を最もよく用い、卒業生が「聞き取れない際の対応」と「推論」をほかの方略よりもよく使用することを意味している。一方、現役大学生も卒業生も「音声・単語」の平均値が最も低かった。二番目に平均値の低い因子は現役大学生も卒業生も「補助」であった。

また、表 5 に表わしたように、現役大学生のほうが卒業生よりも「文化的」の使用頻度が高かった。逆に、卒業生のほうが現役大学生よりも「補助」、「推論」、「聞き取れない際の対応」の使用頻度が高かった。「情報追加」と「音声・単語」では、2 グループの被験者の間に有意差が見られなかった。

5. 考察

本研究では、ベトナム人の現役大学生と卒業生のストラテジー使用を検討し、比較した。その結果から、次のような点が述べられる。まず、「推論」と「情報追加」の間に現役大学生も卒業生の場合も相関関係が見られた。学習者が聞く内容を把握するために、既に持っている知識、前後のつながり、話し手のアクセントやイントネーション、話し手のノンバーバル・ワードに基づく様々な方略を使用する必要があるからである。また、現役大学生も卒業生の場合も、「補助」の使用頻度と「文化的」の使用頻度の間に有意な相関関係が存在することが明らかになった。学習者が日本の映画やドラマのビデオや VCD を見たり、日本の歌を聞いたりすることで日本の文化や日本の事情を学び、それと共に、日本語の聴解練習をすることで解釈できる。「情報追加」と「音声・単語」の間もやや相関関係が見られた。これは、学習者が音声の特徴や単語の文法・文型的な特徴に注意しながら聞くことと共にそれ以外の要素も聞き手が話し手の内容を把握するためには大切だと考えられる。

また、「聞き取れない際の対応」と「補助」、「情報追加」と「補助」、「聞き取れない際の対応」と「情報追加」及び「文化的」と「推論」の間には、大学生の場合、相関関係があるが、卒業生の場合には相関関係が認められなかった。卒業生と比べると、現役大学生のほうが日本人と話したり、日本語を聞いたりするとき、分からない言葉などが多いので、聞き取れない際のストラテジーやノンバーバル・ワード、アクセント、イントネーシ

ョンなどに基づいて、内容を把握する可能性がある。また、日本の文化や日本事情を学ぶ際や日本の歌を聞く際なども分からない言葉があると既に持っている知識と関連づけて聞いたり前後のつながりから推測する場合が多いのであろう。

逆に、「補助」と「推論」及び「推論」と「音声・単語」の間には、卒業生の場合、相関関係があるが、大学生の場合は相関関係が認められなかった。卒業生が推論ストラテジーを最もよく使用することから（表 5）、日本人の話しを聞いたり、ラジオの日本語の放送を聞いたり、NHKの衛星放送を見たりすればするほど、推論ストラテジーをよく使用すると考えられる。さらに、初級の日本語学習者と違い、卒業生がボトム・アップ処理よりもトップ・ダウン処理の方の傾向にあり、推論ストラテジーをよく使用すると、「単語の意味を母語に訳しながら聞く」や「音声の特徴を注意しながら聞く」などの音声・単語ストラテジーを使用頻度が少なくなると思われる。

一方、ストラテジーの使用から見ると、「音声・単語」が、現役大学生も卒業生も最も低い結果となった。つまり、現役大学生も卒業生も日本語を聞く際、音声の特徴（高低・長短・アクセント・イントネーションなど）、及び単語の文法・文型的な特徴などに注意しながら聞くというわけではないことが分かった。逆に、卒業生は内容を把握するように「推論」や「聞き取れない際の対応」をよく用い、現役大学生は日本の文化、日本の事情が分かるように「文化的」をよく使用する。水田（1995）は中国人日本語学習者を対象とし、独話における聞き取り上の問題処理のストラテジーを検討した。その結果、問題を処理する際に、「推測」を含む連鎖が効果的であることなどを指摘している。松浦（1996）は母語話者と学習者を比較した結果、母語話者はかなりの確度で予測を行っているとし、学習者は前件の主語が明示されていなかったり、難しい語彙が使われていたりすると予測がうまくいかない場合があったことを指摘している。福田（2002）によれば、「推測ストラテジーは、学習者が有効的に聴解を成功させ、優れた学習者により早く近づくことができる方法の一つだと言える」。門田（2002）は、人間は「一部を聴いてそこから発話内容について一定の予測を立て、これと実際の音声とを照合することを理解する」と指摘している。

「補助」の使用頻度が 2 番目に低かったのは、現役大学生も卒業生も、「日本人がいるところに行って日本語を聴く機会を作る」、「日本人と話す機会を見つけるようとする」、「ラジオの日本語の放送を聴くようにする」、「NHK の衛星放送を見るようにする」などだった。これはベトナム人の学

習者がこれらのストラテジーをあまり使用しないことを意味している。ベトナムでは、日本語の TV 番組、日本の映画やドラマなどがまだ普及しておらず、学習者が使用する機会が少ないため、それに関するストラテジーの使用頻度が低いと思われる。ベトナムでの日本語教育の歴史はまだ浅く、「日本語の環境」は学校での授業以外は殆どないため、聴解能力を高めるためには、「日本人がいるところに行って日本語を聴く機会を作る」、「日本人と話す機会を見つけるようとする」、「ラジオの日本語の放送を聴くようにする」の日本語を聞く機会を増やすような、現状でもある程度実行可能な「補助」が非常に大切だと思われる。

本研究では、現役大学生が「文化的」ストラテジーを最もよく用い、卒業生が「聞き取れない際の対応」と「推論」をほかのストラテジーよりもよく使用することが明らかになった。また、現役大学生のほうが卒業生よりも「文化的」ストラテジーの使用頻度が高く、卒業生のほうが現役大学生よりも「補助」、「推論」、「聞き取れない際の対応」の使用頻度が高かったことも明らかになった。現役大学生は卒業まで、日本語力の向上と共に日本の事情、日本の文化についての一般的な知識を身につけるようにしているが、卒業生にとって、仕事の場面では、最も重要なのは聞く内容を把握することである。また、現役大学生も卒業生も「音声・単語」の平均値が最も低かった。本研究の対象者は数ヶ月後卒業する予定がある現役大学生 4 年生と卒業生であり、全ての被験者の日本語の学歴は 3 年以上であった。日本語を勉強始まったばかりの学習者と違い、中級程度の日本語の語彙・文法の知識を持っている学習者であるから、トップ・ダウン的なストラテジーを使用して、内容を理解する傾向があると考えられる。そのため、「音声・単語」のストラテジーでは、2 グループの被験者の間に有意差が見られなかったと思われる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、ベトナム人の現役大学生と卒業生を対象とした質問紙調査を行った結果、次のようなことが明らかになった。まず、現役大学生も卒業生の場合も「補助」と「文化的」、「推論」と「情報追加」、「情報追加」と「音声・単語」の使用頻度の間には有意な相関関係が存在した。また、大学生では、相関関係が認められるが卒業生では相関関係が認められない、逆に、卒業生では、相関関係が認められるが、大学生では相関関係が認められないストラテジーもあった。次に現役大学生も卒業生も音声レベル・単音レベルの特徴に注目せずに、聞く内容を把握するようなストラテジーを使用する傾向が見られた。また、現役大学生は「文化的」をよく使用す

るが、卒業生は「推論」と「聞き取れない際の対応」の使用頻度が高かった。

これまでは、学習ストラテジーの指導や訓練が必要であると述べている研究が多く見られるが、具体的に、どんな学習者にどのようなストラテジーを訓練させるべきかなどについてははっきり指摘されていない。本研究の結果からもこのことがまだ分からないし、学習者が実際に日本語を使用する場面で使用するストラテジーと聴解成績との関係についても明らかになっていない。今後の課題として、聴解ストラテジーと聴解成績との関係について調べていきたい。また、その結果から、ベトナムでの日本語教育の現状と今後の方向に合致するストラテジー指導の提案も出していきたい。

参考文献

- 石村貞夫、デズモンド・アレン（1997）『すぐわかる統計用語』東京図書。
- 尹松（2000）「聴解における先行オーガナイザーの効果について—日本語を主専攻とする中国の大学生の場合—」『人間文化論叢』第2巻（1999年度）お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 33-42.
- 尹松（2001）「聴解ストラテジーの使用と聴解力の関係について—日本語を主専攻とする中国人大学生の意識調査の結果から—」『言語文化と日本語教育』第21号、pp. 58-69.
- 河内山 晶子（1999）「聴解ストラテジーの意識的使用による効果—学力差要因と、L1-L2 転移要因を中心に—」『横浜国立大学留学生センター紀要』6号 pp. 27-37.
- 福田倫子・古本裕美・稲見 誠・松見法男（2007）「日本語文の聴解における予測の可能性—中級の日本語学習者を対象とした準 SPOT 課題による検討—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 第56号、pp. 15~200.
- 松浦惠津子（1996）「ニュース文聴解における予測能力—テ形接読を中心とした日本語母語話者と日本語学習者との比較—」『言語文化と日本語教育』、お茶の水女子大学日本語言語文化学研究科、12号、pp. 46~57.
- 水田澄子（1995）「日本語母語話者と日本語学習者（中国人）に見られる独話聞き取りのストラテジー」『日本語教育』、87号、pp. 66~78.
- 門田修平（2002）『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか—第二言語理解の認知メカニズム—』、くろしお出版。
- 日本国際教育支援協会国際交流基金（2007）『日本語能力試験—試験問題と正解』「試験概要」凡人社、p. 92.
- 日本国際教育支援協会国際交流基金（2006）『海外日本語教育機関調査』.
- Andrew D. Cohen, Ernesto Macaro（2007）*Language Learner Strategies: Thirty Years of*

Research and Practice. Oxford University Press.

Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.

補助資料

アンケートの項目

1. 日本語を聴く際、頭のなかでその音をリピートする
2. 日本語の音と母語の音の類似点・相違点を探しながら聴く
3. 視覚的資料がある場合はそれを見ながら聴く
4. 興味があるところは熱心に聴く
5. 聞き取れたものをメモする
6. 分からないところは前後のつながりから推測する
7. 得た情報を基にして話テーマについて推測する
8. 既に持っている知識と関連づけて聴く
9. キーワードなどを探す
10. 音声の特徴(高低・長短・アクセント・イントネーションなど)を注意しながら聴く
11. 単語の意味を母語に訳しながら聴く
12. 単語の文法・文型的な特徴に注意しながら聴く
13. 全体の意味や流れに注意しながら聴く
14. 人がこれから何を言うか考えながら聴く
15. 分からないところは聴き流す
16. 人の話しが分からないとき、リピートしてもらう
17. 人の話しが分からないとき、ゆっくり話してもらう
18. 一回聴いて、分からない場合は、話し手に聞く
19. 話し手のアクセントやイントネーションを基にして意味を把握
20. 自分の知識に基づいてメーン・アイデアを把握する
21. 話し手のノンバーバル・ワードに基づいて意味を把握する
22. 全ての日本語の単音に慣れるまで聴く練習をする
23. 聴解力を高めるための目標を立てる
24. 日本の映画やドラマのビデオやVCDを見るようにする
25. 日本の歌を聴くようにする
26. なるべくたくさんの語彙や文型を覚える
27. 日本文化や日本事情を積極的に学ぶ
28. 日本人と話す機会を見つけるようにする
29. 日本人がいるところに行って日本語を聴く機会を作る
30. ラジオの日本語の放送を聴くようにする
31. クラスメートと日本語で会話するようにする
32. NHK の衛星放送を見るようにする

※ 1 から 21 までは聞く際のストラテジー、22 から 32 までは一般的なストラテジー。